

芥川山城跡の構造について

米原町教育委員会 中 井 均

三好長慶は天文22（1553）に芥川孫十郎の立て籠る芥川城を攻め落した。以後永禄3年（1560）河内飯盛城に移るまで、芥川城は長慶の本拠地として、戦国期畿内における政治の中心的位置を占めていた。

この芥川城については古くより高槻市芥川に所在していたと考えられていた。1967年に刊行された『日本城郭全集』でも字「殿内」周辺に城域を推定している。同書では、三好山城の頁で、芥川周辺を芥川城に推定しつつも、平野で要害性に乏しい点など疑問も残るとし、消極的ではあるが、高槻市原に所在する三好山の城跡こそが三好長慶の芥川城ではなかったかと推定している¹⁾。

1970年代後半に城郭研究は現地に残在する城郭構造そのものを図面化し、比較分析する、いわゆる縄張り研究が飛躍的に進歩した。その結果、芥川に所在したと考えられていた芥川城が長慶の本拠であった芥川城であるという従来の説は大きく訂正する必要が生じてきた。つまり高槻市原に所在する三好山に遺存する城跡の構造が明らかにされたことによって、長慶の本拠地芥川城は、実は三好山の城跡であることがほぼ確実視されるようになったのである。その嚆矢となったのは村田修三氏の一連の業績であろう。1977年には「大和の城跡と国人」のなかで、三好山の城跡の概要図を示され、構造について分析を加えられた²⁾。1979年には三好山の城跡について 村田修三、上山春平、南條範夫の3氏によって誌上対談がおこなわれ、歴史的、構造的に詳細に分析が加えられ、芥川城が三好山に遺存する城跡であることは不動のものとなった³⁾。いわゆる縄張り研究によって三好山の城跡が芥川城であると立証されたことは、芥川城跡を研究するうえで大きな前進となったばかりでなく、城館跡研究にとって、現存する構造を読み込む作業が有効な方法であることも立証したといえよう。以後1981年に刊行された『日本城郭大系』でも⁴⁾、1987年に刊行された図説『中世城郭事典』でも⁵⁾、芥川城は、三好山の城跡が長慶の芥川城として評価されている。

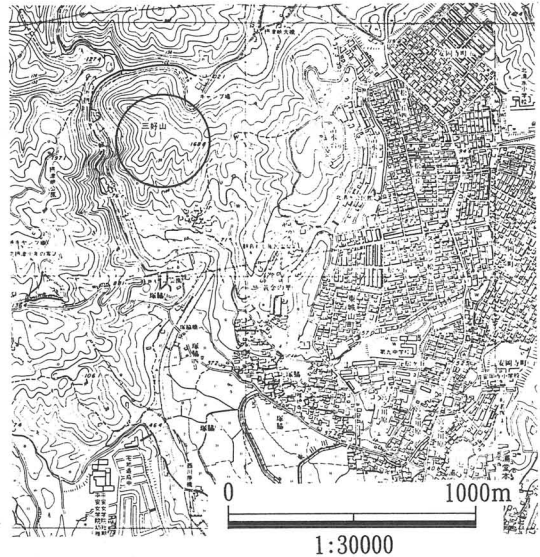


図1 芥川山城跡の位置

ところで城跡の名称であるが、文献上からは芥川城と記されているだけで、こうした点からも従来市内芥川の地が芥川城と誤解されていた。しかも芥川の地にも芥川氏段階の平城は存在しており、より複雑となっている。文献上では現れないが、混乱をさけるため現在では三好山にある城跡を芥川山城跡と、西国街道沿いの芥川の城跡を芥川城跡と呼称している⁶⁾。

さて芥川山城跡は大阪府下では四條畷市に所在する飯盛城跡とともに城郭遺構を良好に残す大規模な山城跡として1970年代後半から城郭研究者に注目されていた。ところが1980年以降いわゆる縄張り研究が飛躍的に進歩し、その嚆矢となった芥川山城跡では逆にその進歩の前段階の研究でとどまっていたのが現状である。

今回高槻市教育委員会による芥川山城跡調査の実施にともない、城跡の全体構造を改めて調査する機会を得た。本稿は三好山に遺存する芥川山城跡の構造を報告するものである。

芥川山城跡は大きく3つのブロックから構成されている(図2、芥川山城跡遺構概要図)。ひとつは主郭①を中心とした西側の曲輪群で、①～⑮がこれに相当する。ひとつは従来出丸と呼称されていた郭⑯を中心とする中央曲輪群で⑯～㉑がこれに相当する。いまひとつは土塁囲いの郭㉒を中心とする東側曲輪群で㉒～㉗がこれに相当する。こうした曲輪配置は一見して、南方を防御正面としていることがわかる。

北方は急斜面で、芥川が流れ、自然の防御線となっており郭㉘付近に、数段の曲輪群を設けるのみである。

郭①は芥川山城跡の最高所(182.69m)に選地されており、主郭に相当する。東側に虎口㉙が設けられている。従来この虎口㉙は単に登山道による破壊と考えられ、まったく評価されていなかった。ところが詳細に観察すると、郭①と郭②の塁線が虎口㉙を挟んで南北でややずれており、いわゆる喰違いとなっている。さらに虎口の城内側では郭①と郭②に段差があり、枅形状の空間を有している。こうした状況から破壊道ではなく、城の虎口として評価できよう。

西北尾根筋は先端を堀切り㉚によって処理しており、郭⑤と郭④の間にも堀切㉛が設けられている。この堀切㉛は土橋の南側で縦堀となっている。土橋を渡り、一端左へ折れて虎口㉙に至る。この虎口㉙の防御を固めるため、郭④の西端と南側はL字状の土塁が主郭①の西北隅より築かれている。

南方へ伸びる尾根筋には郭⑫、郭⑬が設けられ、郭③との間は比高差のある切岸と堀切㉜によって区切られている。堀切㉜は二重堀切であるが、完全に郭⑫を切断するのではなく、曲輪平坦面の両脇から掘り切られており、中央部は掘り残され、土塁を築いている。郭⑬の南斜面は急傾斜面となり、郭⑮に至る。郭⑮と郭⑬・切岸の間に堀切㉝が設けられ

ており、この堀切は西端で豎堀となる。郭⑮と堀切⑩の間には高さ 3 m におよぶ大土塁が築かれている。大土塁が郭の前面ではなく、背面に築かれた理由は村田修三氏が詳細に検討されている⁷⁾。おそらく堀切⑩を設けるため、北面は急斜面で堀切の法面が確保できたことに対して、南面は平坦地であったため、堀切の法面を確保できなかったため、掘り込むか、盛るかによる二者択一で、ここでは土塁を盛ることによって、法面を確保し、堀切の落差を設けたと考えられる。郭⑮はその南端で切岸がつけられず、明確な城域設定をすることなく、尾根筋が続く。これは芥川山城西側曲輪群の地域南端が堀切⑩であり、郭⑮以南に続く小削平地もこの考えからすると、城郭に伴う遺構ではなく、後世の竹林等に伴う造成と考えられそうである。

主郭①の東側には階段状に郭⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪が連続して築かれており、中央曲輪群から主郭①に至るルート of 防御を強固なものとしている。

西側については主郭①の下に郭⑭が設けられているが、芥川に至る急斜面自体が防御施設となっている。

従来から出丸と呼称されている郭⑮を中心とした中央曲輪群については、郭⑮と郭⑧間に自然の大きな谷があり、これが堀切の役目を果たしていたと考えられる。しかし曲輪群の東端では明確に堀切①が設けられていることを考えると、中央曲輪群と主郭を中心とする西側曲輪群は分離独立して防御するものではなく、一連の曲輪群として機能していたようである。

郭⑮と郭⑧の間の南側谷筋が大手道であったと考えられる。谷筋には巨大な石垣を壁面とする郭がある。従来この石垣については、城郭に伴うものと、近世以降の治水に伴うものという評価に分かれていた。石垣の崩落部分を観察すると、栗石が認められることと、表面の石材や積み方が郭⑮の南東隅部の石垣と同一であること、さらに今回の分布調査で新たに確認することのできた郭⑩東側の石垣とも同一のものであることから、谷筋の石垣も城郭に伴う遺構と考えられる。この石垣こそが大手道防御の最大の関門となるわけである。当時のルートは谷筋を登り、石垣の上段の曲輪から左に折れ、スロープを登りつめる。

その正面には郭⑩の石垣が正面に積まれ、さらに石垣に沿って右折して虎口⑤に至るものと考えられる。虎口⑤付近も竹林による破壊が著しく、従来まったく虎口の想定はされていなかった。石垣との関連から虎口であった可能性は高いが、竹林による破壊部分であることも考えられ、地表面からの判断は慎重にならざるを得ない。

谷の北側には郭⑫を中心に小さな曲輪が階段状に削平されている。最北端の曲輪には土塁も認められることから、これら一連の削平地は、城郭に伴うものである。機能としては防御背面の谷筋にあたることから、屋敷地の可能性が考えられ、それを裏付けるように、

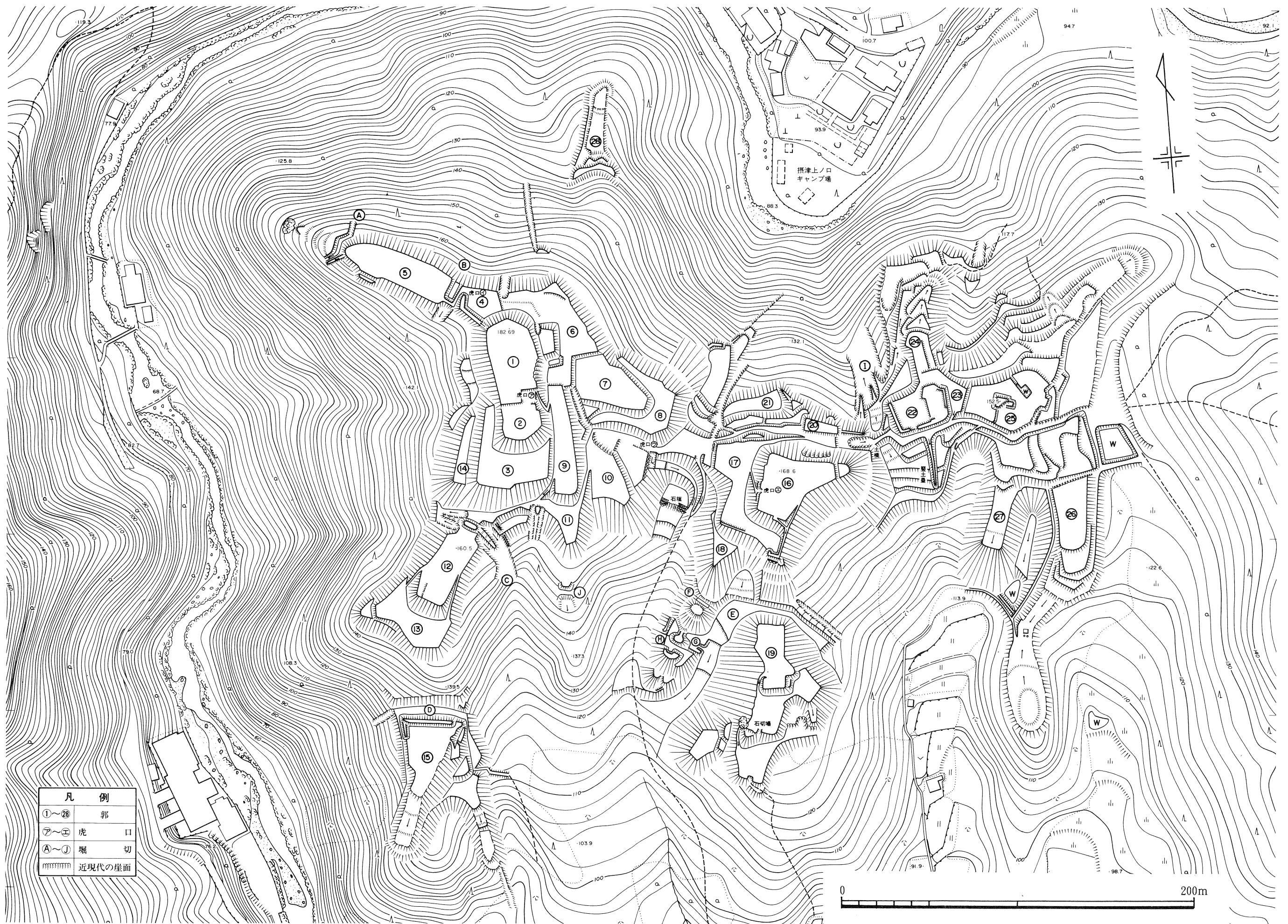


図2 芥川山城跡遺構概要図

遺物も地表面に散乱している。

中心的な郭⑩には虎口㊟が認められる。切岸に斜めに取りつく登山道は後世につくられた道かもしれないが、虎口㊟には前面に横矢がかかるような小削平地が対になっているのが認められる。郭⑩の西側から南側にかけて、L字状に郭⑪がある。南西端部には土塁も認められる。特に南東隅部は土塁で囲み、突出させている。この突出部の南側切岸部のみ石垣が築かれており、注目できる。

南側尾根は郭⑪から南で大きく2段に分岐しており、西側尾根筋には郭⑬があり、それより南方は尾根筋上に堀切㊿、㊾、㊼、が掘り込まれている。この尾根筋の諸施設は大手谷筋の東側防御を目的としたものと考えられる。東側に分岐した尾根筋には大堀切㊾が尾根筋に添って逆U字形に掘り込まれている。さらに堀切㊿の南方にも郭⑲を中心に4つの大きな郭を配し、南方防御の拠点としている。

東側曲輪群との間には堀切①が両側へ堅堀となって掘られて、1つの関門となっているが、この堀切①には見事な土橋を見ることができる。土橋から郭⑪へ進入する虎口は、残念ながら登山道で破壊されており、判然としない。しかし郭⑳から東へ一直線に土塁が設けられているのは、おそらく虎口空間を防御するためのものであり、土橋から郭⑪へ進入する虎口は、芥川山城のなかでも重要な位置を占めていたことはまちがいない。

さて東側曲輪群は郭⑩との間を堀切①によって区画され、郭㉒がその中心的曲輪となる。郭㉒は江戸時代後半以降墓地として利用されてはいるが、東・南・西面に土塁を設けた方形区画の郭である。北方にのびる尾根筋で、郭㉒は切岸もしっかりしており、明らかに城郭に伴う遺構であるが、さらに北方に続く小削平段は城郭のものであるのか、後世のものか判断できない。

郭㉒の南には高さ1mで、約30m続く見事な堅土塁が斜面を一直線にのびている。これは東側から進入してきた敵の斜面地移動を封鎖する目的で築かれたものと考えられる。この堅土塁に守られるように、土塁西側に4段の削平地がある。

郭㉒の東方については郭㉒の副郭として郭㉓があり、その東には広大な削平地、郭㉕が位置している。郭㉕の中央には一段高く櫓台状の土壇がある。土壇は郭㉒同様、墓地として利用されており、城郭に伴う施設か否か疑問が残る。特に中世山城跡の場合、曲輪の四隅に櫓台を設ける事例は多く認められるが、このように曲輪の中央に天守台状のような土壇が位置するものはほとんど類例がない。

郭㉕から東北へのびる尾根上に広大な削平地が数段認められ、また南方へ派生する二つの尾根上にも郭㉖、㉗が認められるが、いずれも現状は竹林であり、後世に改変されたか、あるいは削平された可能性が高い。

城域の東端は帯仕山との間の谷であろうと考えられるが、堀切という施設ではなく、自然の谷をそのまま利用したもので、西端の堀切④、⑥や南方の堀切⑩、⑪に比べて幅こそ広いものの、城内側への比高が低く、防御性は低い。堀切というよりは、むしろ摂津、丹波を結ぶ峠道をそのまま城域に取り込んだ結果といえよう。

この峠道の東側が帯仕山で三好長慶が芥川城に立て籠る芥川孫十郎を攻めるにあたって、天文22年（1553）に数カ月間「陣」を構えた山である⁸⁾。その標高は192.3mで、芥川山城よりも高い。現在帯仕山には「陣」の遺構は認められないが、これは当時の陣城が、後の織豊期段間の陣城のように土塁や横堀をめぐるものではなく、楯を立て並べ、兵が駐屯できる広大なスペースが陣城であったことを示しているのではないだろうか。

興味深いのは、同じ山系で、標高の高い帯仕山に城を築かず、三好山に築かれたことである。帯仕山は確かに標高は高いが、山頂は広大で、起伏がなく、谷筋も存在しない。これに対して三好山は派生する尾根が階段状に加工しやすく、谷が入り込み、堀切を設けやすい。しかも芥川が北から大きく迂回して三方を取り巻き、周囲はかなりの急斜面となっている。こうした地形こそが中世の山城を築くにあたって、最高の要害たりえたのであろう。

以上現存する遺構から芥川山城跡の構造をみてきたが、あくまでも地表面に残る地形からの読み込み作業であり、本文中でも述べたように後世に攪乱を受け、判読不明な部分も多くある。これらについては今後の考古学的調査によって明らかにされていくだろう。

最後に残存する芥川山城跡の年代であるが、曲輪配置の形状などから、おそらく天文22年～永禄3年に存城した三好長慶階段のものと考えて差しつかえないものとする。しかし、今回主郭①で検出された礎石建物跡や枡形虎口、郭⑩、⑪や大手谷筋の石垣など、明らかに部分的ではあるが、永禄年間以降の改修が認められる。こうした改修の時期については永禄11年（1568）の織田信長の侵攻後、信長によって和田惟政が入城した。惟政は翌年高槻城に移り、替って高山飛騨守、彦五郎（右近）父子が入城した。元亀2年（1571）に、惟政は中川清秀に討たれ、同4年には高山氏が高槻城に入り、芥川山城は廃城となった。こうした和田、高山段階に改修を受けたことは容易に想像がつく。おそらく和田、高山両氏による高槻築城に際して、その普請期間中における防御の拠点として、改修され、在続していたものと考えられる。そして高槻城の完成とともにその任を終え、廃城となったのではないだろうか。

なお、芥川山城跡は大阪府下では、同じ三好長慶の居城であった飯盛城跡とともに、規模の大きな中世山城跡として、残存状況も良好で、文献資料も豊富な城跡である。今後永く現状のまま保存され、活用されることが切に望まれる。

註

- 1) 北本 好武「芥川城」・「三好山城」(『日本城郭全集』9 東京・人物往来社 1967年)
- 2) 村田 修三「大和の城跡と国人」(『歴史読本77-6 戦国乱世武将城郭百科』 1977年6月)
- 3) 南條 範夫・上山 春平・村田 修三「戦国の山城と群雄-近畿の要衝・芥川城をめぐる-」
(『歴史読本』304号 1979年7月)
- 4) 中村 博司「芥川城」・「芥川山城」(『日本城郭大系』第12巻 東京・新人物往来社 1981年)
- 5) 村田 修三「芥川山城」(『図説中世城郭事典』3 東京・新人物往来社 1987年)
- 6) 三浦 圭一「戦国動乱と高槻」(『高槻市史』第1巻本編I 1977年)で、三好山に所在する城跡を芥川城としている。同書では、文献資料から芥川城が三好山に所在する城跡であることも推定している。
- 7) 前註2)
- 8) 「(天文二十二年七月三日) 三好筑前守長慶芥川城へ押寄、城ノ東ノ方ヲ帶シ、山へ陣取、対陣シケル
(『足利季世紀』)
「一、同(天文二十二年)七月三日より長慶衆、芥川城東の方を帶し、山へ陣給ふ也」(『細川両家記』)